

# セケ語の名詞句構造と名詞化

本田 伊早夫

## 0. はじめに

本稿では、チベット＝ビルマ語派 (Tibeto-Burman)、タマン語群 (Tamangic) に属するセケ語 (Seke) タンベ方言 (Tangbe) (以降タンベとのみ表記する) における名詞句構造と名詞化について記述する<sup>1</sup>。まず、1. でセケ語の概要について述べた後、2. でタンベにおける名詞句構造について概観する。そして3. においてタンベにおける名詞化 (nominalization) について、他のタマン諸言語・方言と比較しながら記述することにする。

## 1. 言語の概要

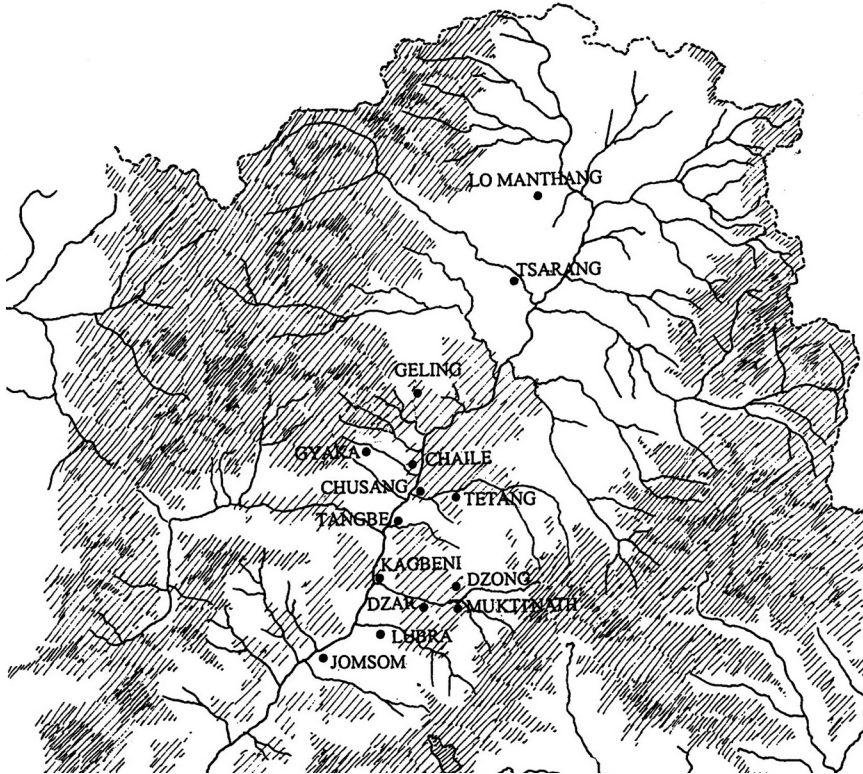
本論文において、また著者のこれまでの論文において、「セケ語」と呼んでいるのは、ネパール・ムスタン郡の5つの村、タンベ (Tangbe)、チュクサン (Chuksang)、テタン (Tetang)、チャイレ (Chaile)、ギャカール (Gyakar) において、およびその出身者によって話されている言語のことである。セケ語はチベット＝ビルマ語派のタマン語群に属する言語であるが、この言語群に属する言語にはセケ語の他に、東タマン語 (Eastern Tamang)、西タマン語 (Western Tamang)、グルン語 (Gurung)、マナン語 (Manangba)、ナル・プー語 (Nar-Phu)、タカリ語 (Thakali)、チャンテル語 (Chantyal) がある。

セケ語が話されている5つの村は、ムスタン郡の District Headquarters であるジョムソム (Jomsom) の北に位置するバラガオン (Baragaon) と呼ばれる地域にあり、バラガオンの北半分ほどを占めている。バラガオンの南半分ほどを占めるその他の村々では、チベット語の方言であるバラガオンレ (Baragaonle) が、また、バラガオンの北に位置するローマンタン (Lo Manthang)、あるいは Upper Mustang と呼ばれる地域では、バラガオンレとは若干異なるが同じくチベット語の方言であるロパ (Lopa) が使われており、セケ語の言語域はこの2つのチベット語方言の言語域に挟まれている。一方、バラガオンの南、カリ・ガンダキ川 (Kali Gandaki) 沿いには、同じタマン語群に属するタカリ語が、またバラガオンの東、マルシャンディ川 (Marsyangdi) 沿いとその周辺にはマナン語とナル・プー語が話されている。

<sup>1</sup> セケ語及びタマン語群についての詳細は、Honda (2002), Honda (2003), 本田 (2010) を参照されたい。

セケ語の正確な話者数は不明であるが、おそらく1千人程度であろうと推測される。しかし近年、ムスタン郡の多くの村々では、南の平野部、特にポカラや、首都カトマンズなどへの移住がますます進んでおり、ネパールの他の少数民族同様、特に村を離れた家庭で育った若い世代は満足にセケ語を習得しておらず、ネパール語への移行が急速に進んでいる。

著者はセケ語を話す集団として、1) タンベ、2) テタン、3) チュクサン=チャイレ=ギャカールの3つを認め、それぞれが話しているものをセケ語の「方言」と便宜的に呼んでいるが、実際にセケ祖語 (Proto-Seke) が再構できるかどうか定かではない。これは程度の差こそあれ、東西タマン語、グルン語、タカリ語にも言えることであるのだが、特にセケ語の場合、上記5つの村の住人およびその出身者が共通の民族的アイデンティティーを共有しているわけではなく、彼らの話している言語が彼らを一つの集団として結びつけているかということ、そういうわけでもない。上記3つの集団が話している言語は、相互にかなりよく似ている点も多い反面、かなり違う面も見受けられる。特に、タンベの言語は、テタンや、チュクサンなどで話されている言語とは、テンス・アスペクト等を表す動詞接辞



地図1 ネパール・ムスタン郡 (Vinding 1998 より)

などの点でかなり違う面があり、両者の相互理解度はそれ程高くない。テタンや、チュクサンなどで話されているものはこういった点においてむしろタカリ語に似ている部分があり、タンベ、テタン、チュクサン=チャイレ=ギャカール、そして一般に‘Thakali’と呼ばれることが多い(著者自身も便宜的にそう呼んでいるが) Yhulkasom Thakali (バラガオンのすぐ南に位置する Syang や Thini など話されているもの)、Mawatan Thakali (その南の Marpha で話されているもの)、Tamang Thakali (そのさらに南の Tukche など話されているもの) は、方言連続体 (dialect continuum)、あるいは方言連鎖 (dialect chain) を成していると言える。

## 2. 名詞句構造

本章では、名詞句を構成する各要素と、名詞句内における各要素間の連辞的 (syntagmatic) 位置について述べながら、名詞句の構造を記述していくこととする。

名詞句の主要素は言うまでもなく名詞 (noun) (あるいは名詞群 (nominal)) であるが、その主要素に対し前置される要素としては、指示詞 (demonstrative; DEM) ((1), (3) 参照) と属格標識 (genitive marker) がついた属格名詞 (noun-GEN) ((2), (3) 参照) がある。

- (1) DEM + Noun-ca + all

<sup>l</sup>ta, <sup>l</sup>toso <sup>h</sup>ucyu <sup>h</sup>ca-ca <sup>4</sup>kājmo <sup>l</sup>nya-se <sup>l</sup>toso <sup>l</sup>kom-pin  
then now that god-ART all 1pl.incl-ERG now pray-HBT

‘Then, we pray (to) all those gods.’

- (2) Noun-GEN + Noun

<sup>2</sup>the-i <sup>l</sup>tīm <sup>l</sup>hin  
3sg-GEN house be

‘(This) is his/her house.’

- (3) [[DEM + Noun]-GEN Noun-ca]

“<sup>h</sup>cu <sup>h</sup>kolā-i <sup>h</sup>sya-ca <sup>l</sup>tak <sup>h</sup>ca-li, <sup>l</sup>kate <sup>h</sup>lim-ka-i”  
this girl-GEN flesh-ART PTCL eat-COND how.much tasty-DIR-GEN

<sup>l</sup>pi-se, <sup>h</sup>kolā-ca-ra <sup>l</sup>tak <sup>h</sup>ca-cyu-wa  
say-SEQ girl-ART-DAT PTCL eat-PAST-NMLZ

“‘If (I) eat this girl’s meat, how tasty is it?’”, said (the monkey, and the monkey) ate the girl.’

一方、名詞に対し後置される要素としては、名詞化接辞 (nominalizer) -pa/-wa

によって名詞化された形容詞 (adjective; Adj) や数詞 (numeral; Num), 例 (1) に見られる <sup>4</sup>kāŋmo ‘all’ などがあり, 名詞化された形容詞と数詞 (あるいは <sup>4</sup>kāŋmo) の両方が共起した場合には Noun + Adj-NMLZ + Num/all の語順となる。

## (4) Noun + Adj-NMLZ

<sup>1</sup>tim      <sup>2</sup>the-wa      <sup>3</sup>so-ci  
house      big-NMLZ      make-PAST

‘(He) made (a) big house.’

## (5) Noun + Adj-NMLZ + Num

<sup>1</sup>ko<sup>1</sup>thā    <sup>2</sup>the-wa    <sup>2</sup>som    <sup>1</sup>then    <sup>1</sup>cyāŋ-pa    <sup>2</sup>som    <sup>1</sup>mu  
room      big-NMLZ    three    and      small-NMLZ    three    be

‘There are three big rooms and three small ones.’

タンベにおける形容詞は, 動詞というカテゴリーの中の1つの特殊なタイプとして位置づけることができるものである。つまり, 形容詞の活用は動詞の活用と共通する点があるものの, 動詞に付く接辞の多くは形容詞には使用されない為, その活用は限定されたものである。形容詞, 動詞に共通して付くことができる接辞の一つが (4), (5) で見られる名詞化接辞 -pa/-wa であるが, 形容詞が, 先行する名詞の属性を表す場合は, 常にこの -pa/-wa が付く (-pa は子音の後, -wa は母音の後で起こる)。このように名詞化された形容詞は基本的には名詞であり, それ自身が名詞句の主要部 (head) となることができる (例えば, <sup>2</sup>the-wa は ‘(a/the) big one’) という事実から, 先行する名詞を修飾している (つまり [N [Adj-NMLZ]<sub>ADJ</sub>]<sub>NP</sub>) というよりはむしろ, その名詞と同格的 (appositive) 構造になっている (つまり [N [Adj-NMLZ]<sub>N</sub>]<sub>NP</sub>) と分析することもできよう。また, 数詞や <sup>4</sup>kāŋmo ‘all’, 次の例 (6) の <sup>1</sup>kate ‘how many, how much’ なども名詞化された形容詞と同じくそれ自身が名詞句の主要部となることができるので, 同様の分析が可能である。つまり (4) の <sup>1</sup>tim <sup>2</sup>the-wa は ‘(a) big house’ というよりは ‘(a) house, big one’, (5) の <sup>1</sup>ko<sup>1</sup>thā <sup>2</sup>the-wa <sup>2</sup>som は ‘three big rooms’ というよりはむしろ ‘room(s), big one(s), three ones’, (6) は ‘In this house, room(s), how many are (there)?’ と訳した方が適当かも知れない。

(6) Noun + <sup>1</sup>kate

<sup>1</sup>cu    <sup>1</sup>tema    <sup>1</sup>ko<sup>1</sup>thā    <sup>1</sup>kate    <sup>1</sup>mu-wa  
this    at.house    room    how.many    be-NMLZ

‘How many rooms are there in this house?’

例 (7) の <sup>ʰ</sup>ap ‘hot’ や (8) の <sup>ʰ</sup>kālo ‘black’ などいくつかの語も、名詞化された形容詞と同じく、名詞の後に置かれる。こうした語は、先行する名詞の属性を表すと考えられるので、意味・機能としては形容詞的であるが、形容詞に付くことができる接辞等が付くことは一切ないので、形容詞とは別のカテゴリーに分類されるものである。当然、名詞化接辞 -pa/-wa が付くこともなく、よってそれにより名詞化されることもない。また、それ自体が名詞句の主要部になることはないで、名詞とも違うカテゴリーの語群である。それ故、こうした語をとりあえず modifier (Mod) と呼ぶこととするが、modifier が名詞化された形容詞と共起する場合は、(8) が示す通り、名詞化された形容詞の方が先行するのが一般的であるようだ。しかし、こうした例はすべて elicitation で収集したものであり、これまでのところ、テキストでは見つかっておらず、そもそもこうした構文が自然発話の中でどれくらい使われるのかは不明である。

(7) Noun + Mod

<sup>ʰ</sup>kyu    <sup>ʰ</sup>ap    <sup>ʰ</sup>pin-o  
water    hot    give-IMP  
‘Give (me) hot water.’

(8) Noun + Adj-NMLZ + Mod

<sup>ʰ</sup>kolā    <sup>ʰ</sup>pep-pa/<sup>ʰ</sup>khe-wa    <sup>ʰ</sup>kālo    <sup>ʰ</sup>kyu-ci  
clothes    expensive/cheap-NMLZ    black    buy-PAST  
‘(She) bought (a) black expensive/cheap garment.’

このような語群は他のいくつかのタマン諸語にも見られ、そうした言語の一つであるマナン語において、Hildebrandt (2004) も著者と同様に、そうした語群（例えば例 (9a) における tārkyā ‘white’）は（名詞句の主要部にはなれないという点で）名詞でもなく、また、名詞化接辞が付くことができる形容詞（例えば例 (9b) における <sup>ʰ</sup>thyΛ- ‘big’）とも異なると述べている。ただし、前者を ‘simple adjective’、後者を ‘verb-like adjective’ と呼び、区別しつつも、どちらも ‘adjective’ と呼んでいる。ちなみに、Genetti et al. (2008: 115) は後者を ‘deverbal adjective’ と呼んでいる。

(9) Manangba

a. <sup>ʰ</sup>khye    tārkyā=ri  
road    white=LOC  
‘on the white road’

(Hildebrandt 2004: 54)

- b. <sup>2</sup>kyu <sup>1</sup>thyΛ-pΛ=ri  
 water big-NMLZ=LOC  
 ‘in big water (like a river)’ (Hildebrandt 2004: 60)

先に述べた通り、著者自身はタンベにおいて、名詞化されている形容詞は、それが意味的に修飾していると考えられなくもない名詞と同格的である可能性があると考えているが、Genetti et al. (2008: 115) は、名詞化接辞が付いた *deverbal adjective* は名詞ではなく、*simple adjective* と同じように、修飾される名詞に対して従属的な関係になっている、つまり [N [Adj-NMLZ]<sub>ADJ</sub>]<sub>NP</sub> という構造になっていると主張している。この点に関しては、後に述べる関係節の構造にも関係している為、3.2.において更に詳しく述べることにする。

名詞句内において名詞の後に置かれる要素としては、他にも例(10)に見られる <sup>1</sup>ri がある。

- (10) Noun + <sup>1</sup>ri  
<sup>2</sup>kheppa <sup>ʰ</sup>khuyuk-ca-ra <sup>ʰ</sup>kome <sup>1</sup>ri <sup>1</sup>mu-cyu-wa  
 old.man old.woman-ART-DAT GD one be-PAST-NMLZ  
 ‘To the old man (and) old woman, there was one/a granddaughter.’

著者のインフォーマントはこの <sup>1</sup>ri を常に ‘one’ と訳し、数詞 ‘one’ の本来の形 <sup>1</sup>ki(:) と意味の上で何の違いもないと説明していることから、著者はこれを注釈する際、やはり ‘one’ としてはいるが、これは数詞 <sup>1</sup>ki(:) の音韻的に条件づけられた異形ではない為、<sup>1</sup>ki(:) が歴史的に文法化 (grammaticalized) されたもので、*indefinite article* として分析も可能な形式であると考えている。<sup>1</sup>ri が名詞化された形容詞と共に起する場合、数詞が形容詞と共に起する場合と同様、形容詞が先行するという事実もそうした分析を支持するものである<sup>2</sup>。

- (11) Noun + Adj-NMLZ + <sup>1</sup>ri  
<sup>2</sup>the-ra <sup>1</sup>tim <sup>ʰ</sup>te <sup>ʰ</sup>cyāŋ-pa <sup>1</sup>ri <sup>1</sup>mu /<sup>ʰ</sup>hon  
 3sg-DAT house a.bit small-NMLZ one be /be  
 ‘S/he has a bit small house.’

似たような形式と文法化は、同じタマン語群に属し、地理的にも近いマナン語 (=ri ‘indefinite marker’ Hildebrandt 2004: 77) やナル・プー語 (-ri ‘indefinite singular article’ Noonan 2003: 344) にも見られ、どちらも拘束形式 (bound) の clitic として分析されている。ただし、Hoshi (1986) ではマナン語の ‘indefinite marker’ に

<sup>2</sup> 例(11)はまた、<sup>ʰ</sup>te ‘a bit’ という語が名詞化された形容詞に先行していることを示しているが、このように形容詞を修飾する語は常に形容詞に先行する。

ついて、拘束形式の *-ri* と共に非拘束形式 (non-bound) の *ʔri* も併記されており、後者については、それ自身が名詞として ‘somebody’ といった意味で使用されている例も掲載されており、音調 (tone) を保ったままの独立した語から拘束形式の *-ri* へと文法化される過程にあるように思われる。タンベにおいても *ʔri* は音調を (少なくとも完全には) 失っておらず、また前述した通り、著者のインフォーマントがこれを *ʔki*(:) と同じく常に ‘one’ として訳し、両者の違いを単に発音上の異形としてしか認識していないことから、マナン語と同じく、この *ʔri* はまだ文法化過程の半ばであると考えられる。

これまで見てきたのはすべて、名詞句内に起こり得る独立語であったが、名詞句内に起こり得る要素には、名詞やその他の独立語に付く拘束形式の形態素がいくつもある。その一つが例 (1), (3), (10) に見られる *-ca* である。これは隣接するタカリ語 Marpha 方言などに見られる ‘plural marker’ *-ca* (Georg 1996; Georg の表記では *-cā*) と同源と考えられること、また著者のインフォーマントがこれをやはり plural marker として説明していたことから、著者ははじめこれを plural marker であると誤って理解していたが、その後、明らかに単数の人物・対象物を指している名詞に使われている例が数多く見つかった。例えば例 (3) で *-ca* が付いている名詞 *ʔsya* ‘meat, flesh’ が表しているのは数えられるようなものではないし、以下の例 (12) の *ʔucyu ʔmi ʔpo-wa* が指しているのは複数の人物ではなく、この物語の中で既出の人物、死んだ息子の父親個人を指している。

- (12) *ʔtakce, ʔucyu ʔmi ʔpo-wa-ca-se, ʔʔa-i ʔca-ten ʔcāŋ ʔhin-ka;*  
 then that person rich-NMLZ-ART-ERG 1sg-GEN S-with SW be-DIR  
*ʔta ʔcu ʔnimyā ʔni-pa-ra ʔʔa-se ʔpā-tok-ka ʔpi-se,*  
 then this bird two-NMLZ-DAT 1sg-ERG bring-have.to-DIR say-SEQ  
*ʔpā-cyu-wa*  
 bring-PAST-NMLZ  
 ‘Then, that rich person (i.e., the father of the son) said, “(They, i.e., two birds) (must) be my son and son’s wife; I have to bring those two birds back”, (and) brought (them) back (to his house).’

*-ca* はむしろ definite article のような機能を果たしており、著者はこれを ART (article) と注釈している。ただし、会話・談話の中で既出の指示対象だけでなく、新出のもの、つまり new information である名詞にも付くことなど、topic marker と呼ぶ方が妥当と思われる点もある。なお、著者はこれがタマン諸語の多くで見られる、名詞の前に置かれる指示詞 *ca* ‘that’ (例えばタカリ語の *ca* ‘that’) や東タマン語の ‘topic marker’ *ʔca* などと歴史的に関係していると考えている<sup>3</sup>。

<sup>3</sup> ただし、タンベでは指示詞 ‘that’ は例 (12) に見られる *ʔucyu* であり、*-ca* の同源形は指示詞としては使われていない。なお、この *-ca* について更に詳細な議論は Honda (2007) を参照されたい。

### 3. 名詞化

タマン語群、およびタマン語群と系統的に最も近いと考えられているチベット語や、両者が属するとされる Bodic において、これまで最も活発に議論されてきた言語現象の一つが名詞化である。タマン諸語の名詞化について触れた論文としては、DeLancey (2005), Genetti (2011), Genetti et al. (2008), Noonan (1997), Noonan (2007), Noonan (2008), Noonan (2011), Varenkamp (2003) などが、また、チベット語、Bodic 諸語の名詞化については DeLancey (1999), DeLancey (2005), Genetti (2011), Genetti et al. (2008), Watters (2008) 等の先行研究がある。

本章では、タンベにおける二つの名詞化接辞 *-pa/-wa* と *-la(ŋ)*、そしてそれらによる名詞化について取り上げ紹介する。まず 3.1. にて名詞化接辞 *-pa/-wa* とその機能について概観した後、3.2. にてその機能の一つである関係節化 (relativization) と関係節の構造について述べる。更に、関係節化の際、タマン諸語において属格標識が使われている言語と使われていない言語があるという、Michael Noonan が Noonan (1997) 他で議論している点を詳しく吟味していく。3.3. ではもう一つの名詞化接辞 *-la(ŋ)* について、これと同源形である可能性のある他のタマン諸語における接辞と比較しながら記述する。

#### 3.1. 名詞化接辞 *-pa/-wa*

上記の論文で詳しく論じられているように、セケ語を含めすべてのタマン諸語・方言において、*-pa* や *-wa* といった形の名詞化接辞による名詞化が広く見られ、それぞれの文法において極めて重要な位置を占めている。タンベの名詞化接辞 *-pa/-wa* は、言うまでもなく古チベット語 (Classical Tibetan) の *-pa* や、他のチベット=ビルマ諸語に広く分布する、同様の、あるいは類似した形と機能を持つ形態素と同源であり、それらの形式はチベット=ビルマ祖語 (PTB: Proto-Tibeto-Burman) にまで遡ると考えられている。Benedict (1972: 96) はこれを ‘verbal noun (infinitive) suffix’ *\*-pa ~ \*ba* として再構築しているが、同じく PTB で再構築している ‘gender suffix (masc.)’ *\*-pa* とも関係しているとしている。また、DeLancey (2005) はこの *\*-pa* による名詞化/関係節化が Proto-Bodic レベルにまで遡り得ると推測している。

Noonan (1997) は、セケ語と同じくタマン語群に属するチャンテル語の名詞化接辞 *-wa* による名詞化の機能として以下のものをあげているが、タンベ (や他の多くのタマン語群諸語) における *-pa/-wa* による名詞化の機能もだいたい同じようなものである<sup>4</sup>。

<sup>4</sup> ただし、Noonan (1997) がチャンテル語の名詞化 (接辞) について記述しているすべての事柄がタンベにも当てはまるというわけではない。



1. nominalization [i.e. naming activities and states]
2. verb complementation
3. noun complementation
4. purpose clause
5. relative clause
6. non-relative attributive
7. agent and patient nominal
8. attributive nominal
9. expression of the semantic predicate in verbal periphrasis
10. main verb

次節ではこの内、5の relative clause、関係節化に絞って見ていくこととする。

### 3.2. 関係節化

#### 3.2.1. 関係節の構造

タマン語群諸語では、節が名詞を修飾する際、節の最後尾要素である動詞に名詞化接辞が付き、節全体が名詞化され、修飾する名詞の前に置かれる。その際、名詞化接辞の後に属格標識が付く言語・方言と付かない言語・方言の両方がある。前者の例としてグルン語（Ghachok 方言）の例を、後者の例としてチャンテル語の例を示す。いずれも Noonan (1997) からの引用である。

#### (13) Gurung

cá	pra-bá-e	mxi	jaga
that	walk-NMLZ-GEN	person	PL

‘those walking people’ (=sentries) (originally from Glover 1974: 97)

#### (14) Chantyal

gay-ye	sya	ca-wa	mənchi
cow-GEN	meat	eat-NMLZ	person

‘the person who is eating beef.’

(Noonan 1997: 376)

これに対してタンベでは、修飾される名詞の前に関係節が置かれるという点は他のタマン諸語と同様であり、また属格標識が使用されるという点はグルン語などと共通しているものの、多くの場合、節の最後尾要素である動詞の語幹に名詞化接辞が現れることはなく、動詞語幹に属格標識が直接付く形となっている。このように関係節に名詞化接辞が現れない形はタマン語群言語・方言では唯一の例である。ちなみに、この構造は例(2)で見た Noun-GEN + Noun の構造と基本的に同じものである。また、タンベでは他の多くの言語（特にアジア地域の言語）

と同様、節において主語、目的語などの動詞の項は必ず現れなければならないというわけではないので、関係節も動詞だけで構成されているケースも多い（例えば例(16)参照）。

- (15) <sup>L</sup>kolā    <sup>H</sup>khu-i    <sup>H</sup>sapun    <sup>L</sup>hin  
clothes    wash-GEN    soap    be  
'(This) is (a) soap to wash clothes.'
- (16) <sup>H</sup>ŋa    <sup>H</sup>kha-i    <sup>H</sup>hapta-ra    <sup>L</sup>palpu-ri    <sup>L</sup>ni-sin  
1sg    come-GEN    week-DAT    Kathmandu-LOC    go-FUT  
'I will go to Kathmandu (this) coming week.'
- (17) <sup>L</sup>takce    <sup>ʔ</sup>ke-ri    <sup>H</sup>kyu    <sup>ʔ</sup>pa-i    <sup>L</sup>kyor-ca    <sup>4</sup>kāŋmo    <sup>L</sup>ʃi:-ca  
then    field-LOC    water    bring-GEN    irrigation.canal-ART    all    flood-ART  
<sup>ʔ</sup>kyā    <sup>L</sup>por-cyu-wa  
PTCL    take.away-PAST-NMLZ  
'Then, the flood took the irrigation canal(s) (that) bring water to field(s), all away.'
- (18) <sup>L</sup>syu:-ra    <sup>H</sup>ucyu    <sup>H</sup>ra    <sup>ʔ</sup>cha-wa-ra    <sup>L</sup>ne-i    <sup>L</sup>mi-ca-se  
later-DAT    that    goat    graze-NMLZ-DAT    go-GEN    person-ART-ERG  
“<sup>H</sup>tā:    <sup>L</sup>hin-pi-la    <sup>L</sup>ote-wa    <sup>L</sup>ri”    <sup>L</sup>pi-se    <sup>L</sup>se-na    <sup>L</sup>la-se  
what    be-CONF-Q    this.much-NMLZ    one    say-SEQ    good-ADVLZ    do-SEQ  
<sup>H</sup>cyā-laŋ-ten    <sup>ʔ</sup>thi-ma    <sup>L</sup>ni-pa    <sup>L</sup>lyāŋmo    <sup>L</sup>sye:-wa  
look-NMLZ-when    3pl    two-NMLZ    talking    speak-NMLZ  
'Later, that person, (who) went to graze goat(s) said, “What is this (lit. What is this much one)?” (and) when (he) looked carefully, they two (i.e., the birds) were talking (lit. talk) (to each other).’
- ただし、これは動詞語幹が母音で終わるケースでのことであり、動詞語幹が子音で終わる場合は、語幹の後に -pi をいう接辞が現れる。これは以下に述べる西タマン語やタカリ語 Tukche 方言などの例から推測するに、名詞化接辞 -pa と属格標識 -i が融合した形 (<\*-pa-i) と思われる<sup>5</sup>。
- (19) <sup>L</sup>che    <sup>H</sup>lop-pi    <sup>L</sup>kyā  
book    learn-NMLZ.GEN    place  
'place to study (i.e., school)'

<sup>5</sup> 属格標識が名詞に付く場合、r を除くすべての環境で属格標識は -i という形態で現れ (r の後では -ki となる)、-pi という形が現れることはなく、例(19)や(20)のように -pi という形が現れるのは子音で終わる動詞・形容詞語幹の後のみである。

- (20) <sup>H</sup>miŋ      <sup>H</sup>kon-pi      <sup>L</sup>kolā  
 female      wear-NMLZ.GEN      clothes  
 ‘dress for female to wear’

しかし、インフォーマントはこの -pi を名詞化接辞 + 属格標識として認識しているわけではなく、また、例 (15)–(18) のように動詞語幹が母音で終わるケースでの動詞語幹 -i の形を、名詞化接辞 -pa が省略されたものと認識しているようなこともない為、動詞語幹が子音で終わるケースで見られる -pi はすでに -i の異形態として再分析されており、タンベにおける関係節化においてはもはや名詞化接辞が使われていないと分析することも可能であろう。

タンベではまた、チャントル語と同様 (例 (22) 参照)、関係節において「過去」を表す接辞が使われる別の構文も可能である<sup>6</sup>。このようにテンスによって構造が異なるケースは、タマン語群内で他にもナル・プー語とタマン語 Dhankute 方言において見られる (Noonan 2011 を参照)<sup>7</sup>。

- (21) <sup>H</sup>cu      <sup>H</sup>āsyāŋ-ce      <sup>H</sup>pin-ci-i      <sup>L</sup>che      <sup>L</sup>hin  
 this      uncle-ERG      give-PAST-GEN      book      be  
 ‘This is (a) book (that my) mother’s brother gave (to me).’

- (22) Chantyal  
 gay-ye      sya      ca-si-wa      mənchi  
 cow-GEN      meat      eat-ANT-NMLZ      person  
 ‘the person who ate beef.’ (Noonan 1997: 376)

また以下の例 (23) のように、形容詞語幹に属格標識が付き、修飾される名詞の前に置かれる構文も存在するが、この構造は動詞が節の最後部要素である関係節の構造と全く同じであり、同様に関係節として分析すべき構文であろう<sup>8</sup>。

- (23) <sup>H</sup>ti-rā      <sup>H</sup>no,      <sup>L</sup>mince,      <sup>H</sup>ha:<sup>L</sup>lena      <sup>2</sup>the-i      <sup>L</sup>tji:      <sup>H</sup>yu-cyu-wa  
 one-day      TOP      night      very      big-GEN      flood      come.down-PAST-NMLZ  
 ‘One day, (at) night, (a) very big flood came.’

このようにタンベでは (4) などのように、形容詞が名詞の後に置かれる構文と

<sup>6</sup>ただしこうした構文は、(8) で示した構文同様、すべて elicitation で収集したものであり、これまでのところテキストでは見つかっておらず、更なる調査・確認が必要であることを付記しておく。

<sup>7</sup>Poudel (2006) が記述している ‘Dhankute Tamang’ は、Poudel 自身が東タマン語でも西タマン語でもない、第三のタマン語の方言であるとしているが、著者自身未だその見解の妥当性について検討・確認しておらず、ここではとりあえず「タマン語 Dhankute 方言」と記しておく。

<sup>8</sup>このようなケースはまだ一つしか見つかっておらず、名詞化された形容詞が名詞に後置する構文とはどのように (意味・語用論的に) 違うのか、どのくらいの頻度で使用するのか等、更なる調査が必要である。

(23) のように前に置かれる構文とがあり、この点で古チベット語と共通している。更に、前者では属格標識が使用されるのに対して後者では使用されないという点も同じである。ただし、動詞・形容詞語幹が母音で終わる場合、名詞化接辞が現れないという点と、動詞を含む関係節が名詞の後に置かれることはないという2点において古チベット語と異なっている。

(24) Classical Tibetan

a. mgyogs-po-i     rta  
fast-NMLZ-GEN   horse  
‘fast horse’

b. rta     mgyogs-po  
horse   fast-NMLZ  
‘fast horse’

(Noonan 2008; originally from Beyer 1992)

古チベット語におけるこれらの構文は、(25) のような、動詞を含む関係節の構造と基本的には同じであり、特に区別して扱う必要があるものではなく、(24ab) も (25ab) と同様に関係節として分析されている(例えば Noonan (2008: 229) 参照)。それを考えると、タンベにおける (4) のような構文、つまり名詞化された形容詞が名詞の後に置かれる構文も関係節として分析できるのかも知れない。

(25) Classical Tibetan

a. bla-ma-s     btul-ba-i             bgegs  
lama-ERG     tame-NMLZ-GEN     demon  
‘the demon which the lama tamed.’

b. bgegs     bla-ma-s     btul-ba  
demon     lama-ERG     tame-NMLZ

‘the demon which the lama tamed.’ (Noonan 2008; originally from Beyer 1992)

DeLancey (2005: 57) は、古チベットにおける (25a) のような構文、つまり関係節に属格標識が現れ名詞の前に置かれる構文と、(25b) のように関係節が属格標識無しで名詞の後に置かれる構文とを対比し、前者はその属格標識の存在から主節に対し従属的 (subordinate) であるとする一方、後者は名詞化された動詞が属格標識無しで先行する名詞に並置していることから、修飾される名詞と同格的であるという見方を示している (DeLancey (1999: 244) も参照)。Noonan (2008) はこの DeLancey の見解に同意の意を示し、チャンテル語における例 (14) や以下

の(26)のような構文，つまり関係節が属格標識無しで名詞に先行する関係節も古チベットの(25b)などと同様，基本的には *nominal* (名詞類) であり，後続する名詞を修飾しながらもそれと同格であると分析し，例えば(26)のケースでは，修飾する名詞の前に置かれている *reysi thū-wa* は *agent nominal* であり，その基本的な意味は ‘drinker of raksi’ であると述べている。

(26) Chantyal

reysi thū-wa mənchi  
raksi drink-NMLZ person

‘the person who drinks raksi’

(Noonan 2008: 226)

更に Noonan (1997) は，以下の例(27)のように，チャンテル語本来の形容詞 *thya-* ‘big’ とネパール語からの借用語である *kalce* ‘black’ が共に修飾される名詞の前に置かれている構文を，動詞が最後尾要素である関係節が名詞の前に置かれる構文と同様，関係節として分析できるとしている。

(27) Chantyal

thya-wa kalce naku  
big-NMLZ black dog

‘big, black dog’

(Noonan 1997: 377)

このような分析に対し，Genetti et al. (2008: 115) はマナン語の例を使いながら，例(9b)の *thyΛ-pΛ* のような，名詞化接辞 *-pΛ* によって名詞化された形容詞は ‘lexical noun’ ではなく，また，先行する名詞に対して同格的ではなく，従属的な関係にあると主張していることは2. で述べた通りである。以下，例(9)を再録する。

(9) Manangba

a. <sup>4</sup>khye tɹrkya=ri (simple adjective)  
road white=LOC

‘on the white road’

(Hildebrandt 2004: 54)

b. <sup>2</sup>kyu <sup>1</sup>thyΛ-pΛ=ri (deverbal adjective)  
water big-NMLZ=LOC

‘in big water (like a river)’

(Hildebrandt 2004: 60)

このように分析する理由・根拠を Genetti et al. (2008: 115, note 21) は二つ上げている。一つは，名詞化接辞が付いた ‘deverbal adjective’ は(9a) *tɹrkya* ‘white’ のような ‘simple adjective’ と統語的に同様の振る舞いをしており，名詞のそれとは

異なる（名詞が名詞を修飾する際、このように修飾される名詞に対して後置されることはない）という点であり、もう一つは、‘enclitic’である格標識が名詞句の主要素である名詞にではなく、‘deverbal adjective’に付いていることが何より、‘simple adjective’同様、先行する名詞と一つの名詞句を構成していることを示している、というものである。しかしながら、どちらの理由付けも‘deverbal adjective’が同格的ではないという根拠にはなっていない。まず、一つ目の理由であるが、これは‘deverbal adjective’が名詞とは異なる振る舞いをしているということを示しているのみで、それが先行する名詞と同格的でないという根拠にはなっていない。そして二つ目の理由についてだが、確かに格標識は名詞句全体に係りうるし、その際は名詞句の最後尾要素に bound していると考えられ、著者もそのように考えているが、‘deverbal adjective’に bound しているという事実だけでは、Genetti らが主張しているように格標識が名詞句全体に係っている ([N [Adj-NMLZ]<sub>ADJ</sub>]<sub>NP</sub>-clitic) という証明にはなっておらず、名詞化された形容詞にのみ係っている ([N], [Adj-NMLZ]<sub>N</sub>-clitic) という可能性を否定できるものではない。

とは言え、例えば名詞化された形容詞（や数詞など）が先行する名詞と同格的な構造を構成しているとしても、現代の（特にネパール語や英語などを学習した若い世代の）母語話者がそのような認識をしているというわけでは必ずしも無く、その同格性はかなり緩いものとなっている、あるいは、Genetti らが考えるような、名詞を修飾しそれに従属する構造として理解されるように変化しつつあると考えるのが妥当かも知れない。

### 3.2.2. 他のタマン諸語における関係節構造：属格標識の使用について

以上、タンベにおける関係節の構造について述べてきたが、タマン語群内全体で見た場合、その構造がどれ程一般的、あるいは特異であるかを明らかにするという趣旨で、以下、Michael Noonan が Noonan (1997), Noonan (2007), Noonan (2008), Noonan (2011) においてタマン諸語における名詞化、関係節化の構造についてまとめている記述について検証し、そこでの誤り、あるいは読者に誤解を与える・与えかねない箇所を指摘し、訂正しておきたい。

まず第一に、Noonan (2007), Noonan (2008: 230), Noonan (2011: 203) は、セケ語について ‘Isao Honda (personal communication) reports that the genitive is optional with nominalizations’ と述べているのであるが、これは明らかに間違った記述である。これまで見てきたように、タンベでは関係節化において常に属格標識が使用され、その使用は決して ‘optional’ ではない。むしろ ‘optional’ と言えなくもないのは、属格標識ではなく、名詞化接辞の方である。Noonan の記述は、私とのメールでのやり取りの中で私がタンベの関係節構造について彼に例文付きで伝えた内容が基になっているのだが、彼がそれを誤って解釈したのであろう。また、彼に伝えた内容はタンベについてのものであり、それがセケ語すべてに当てはまるような記述をしていることも適当でない。

第二に、タカリ語 Tukche 方言（1章において‘Tamang Thakali’として紹介した方言・variationに含まれる）について、Noonan (2007), Noonan (2008: 230), Noonan (2011: 203) は‘Hari and Maibaum (1970) assert that the genitive is optional’と述べているが、これは Hari and Maibaum (1970) が述べていることを十分正確に表現したものとは言い難い。Hari and Maibaum (1970: 303) は以下のように述べている。

‘To the simple indefinite non-past form (=verb stem + “wa ~ -pa [sic]) and the past perfect form (=verb stem + “ci-wa”) the genitive suffix “-e” is added to form adjectives. In fluent speech, however, the “-e” suffix often fuses with the “a” and the affixes become “-we/-pe” and “-we”. Sometimes the “-e” is omitted, that is, the verbal forms are used as adjective.’

つまり、属格標識が使用されるのが本来の形であるが、省略されることもある、ということであり、‘optional’とはちょっとニュアンスが違う。

第三に、西タマン語についての記述、‘The examples in Taylor’s (1973) article suggest that the genitive may be used with relative clauses in Western Tamang’ (Noonan 2008: 230) も正確ではない。Taylor (1970) や Taylor (1973) は関係節に属格標識が付くか否かという点について何ら言及していないので、はっきりしたことはわからないが、Taylor (1970) と Taylor (1973) における例文を見る限り（と言っても Taylor (1970) は‘Tamang Texts’であり、例文が多く、すべてのケースをチェックできているかどうかかわからないが）、動詞語幹に名詞化接辞の -pa、そしてその後属格標識 -i が付く形、V-pa-i か、動詞語幹に直接 -pi という接辞が付く形、V-pi のいずれかであるようだ。後者はタカリ語 Tukche 方言の -we/-pe、あるいは後述するマナン語のケースなどと同様、名詞化接辞 -pa と属格標識が融合した形であると考えられる。

第四に、マナン語について Noonan は Hildebrandt (2004) の記述のみを頼りにしているが、Hoshi (1986) には関係節の構造についてかなり違う記述が見られ、それに言及していないのは残念である。まず Hildebrandt (2004) の記述であるが、それによるとマナン語における関係節では属格標識が使用されておらず、名詞化接辞 -pa によって名詞化された関係節が修飾される名詞の前に置かれる。ただし、Noonan が触れているように、Hildebrandt (2004: 113) は‘At times in relativised contexts the vowel quality of /a/ fronts and sounds like: [pe] or [pœ] ... This phonetic alternation does not appear to correlate with any particular functional difference, however’ と述べており、この phonetic alternation の由来・起源をどう解釈するかで見解が分かれるところである。Delancey (2005) はこれを、グルン語などに見られる V-NMLZ-GEN の形と対応している、つまり西タマン語やタカリ語 Tukche 方言と同じく、名詞化接辞と属格標識が融合した形であると解釈しているが、これに対し Noonan はその可能性を認めつつも、二つの点からこれに疑問を投げか

けている。まず第一の点であるが、マナン語と系統的、地域的にかなり近いナル・プー語における関係節化においては、‘present’の意では名詞化接辞 *-pe* が使われるのに対し、‘past’の意では *-pi* という形が使われるが、この後者の *-pi* の母音 *i* は、*copula mu* などの後に付き、同じく ‘past’の意を表す接辞 *-i* が起源である可能性が高く、ナル・プー語の属格標識 *-ye/-i* (Noonan 2003) が起源である可能性を ‘isn’t likely’ であると述べ、Hildebrandt が記述している *phonetic alternation* もナル・プー語と同じようなシナリオである可能性を指摘している。第二の点は、Noonan が指摘しているように、Hildebrandt の *grammar* ではマナン語の属格標識は *-la* であり、Hildebrandt が報告している *phonetic alternation* [*pe*] ~ [*pœ*] を説明するには、[*pe*] ~ [*pœ*] は *-la* とは別の（おそらくそれより古い）属格標識 *\*-i*（あるいは *\*-e*）が名詞化接辞についたものであると想定する必要があるということである。とは言え、Noonan も述べているように、属格標識 *-i* あるいは *-e* といった形はタマン諸語・方言の多くで見られるものであり、こう想定することにそう大きな問題はなく、現在のところ、マナン語の *phonetic alternation* [*pe*] ~ [*pœ*] の起源は明らかでないと言うしかない。

次に Hoshi (1986) の記述であるが、こちらでは、節の最後尾に位置する動詞に名詞化接辞と思われる *-pa* が付き名詞化された後に接辞 *-ʔa* が付き関係節化されるとされている。Hoshi (1986) には明記されていないのだが、この接辞 *-ʔa* はその形、分布（母音 *ə* の後で欠落する）とも属格標識 *-ʔa* と同じであり、同一の形態素であると推測される（Hildebrandt の記述での属格標識 *-la* と同じものと思われる）。つまり関係節化にあたって属格標識が使用されているわけであり、Hildebrandt の記述とは大きな違いである。Hoshi (1986: 287) によれば、この *-ʔa* は母音 *ə* の後でしばしば欠落するとのことであるのだが、名詞化接辞 *-pa* と *-ʔa* が融合することがあるというような記述や例はない。そして、*a* という母音の音質を考えても、*V-pa-ʔa* が Hildebrandt が報告している [*pe*] ~ [*pœ*] に変化したとは考えにくい<sup>9</sup>。

第五に、グルン語についての記述についても問題がある。Noonan (2008: 230), Noonan (2011: 204) は ‘Glover’s 1974 grammar states that the genitive is always used with relative clauses, making Gurung then the only Tamangic language to use the genitive consistently’ とタマン諸語全体についてまとめているのであるが、実は Noonan 自身が Noonan (1997: 384–5) で、‘the genitive is omitted in “fast speech”’ と言及しているように、Glover (1974: 89) にそのような記述と例があり、状況はタカリ語 *Tukche* 方言や西タマン語と同様、決して ‘to use the genitive consistently’ とは言えないのであるが、どうして Noonan が Noonan (1997) ですでに把握して

<sup>9</sup> Hildebrandt と Hoshi 間のこの記述の違いが彼らのインフォーマントにあることは疑いないが、Hildebrandt の第一インフォーマントと Hoshi の第一インフォーマントはどちらも *Praka* 村の出身である（前者は父親が *Praka* 村の出身）ことを考えると、方言差によるものとは考え難い。ただし、両者の間には 50 歳程の年齢差があり、これが上記の違いの理由かも知れない。ちなみに、Mazaudon (1988) は ‘To me, the whole of Manang valley is one dialect’ と述べており、また著者自身のマナン語の調査経験、インフォーマント数人とその家族からの情報から、著者自身もマナン語にはそう大きな方言差はないと判断している。



いたこの内容に後の論文では言及していないのかは謎である<sup>10</sup>。Noonan(2008: 230)はまた、‘In sum, within the Tamangic group, the genitive seems firmly established only in Gurung; elsewhere it is either optional or is not used’とも述べているが、これまで見てきたように、関係節化の際、属格標識が使われるのは、タマン語群においてグルン語の他、タカリ語 Tukche 方言、西タマン語、マナン語、そしてセケ語タンベ方言にも見られ、かなり広く分布している言語現象であると言えよう。確かに属格標識が fast speech などで脱落したり、名詞化接辞と融合したりするケースが多いようであるが、それらを ‘optional’ と表現するのは正確性を欠いており、読者に誤解を与えかねない。

### 3.3. 名詞化接辞 -la(ŋ)

タンベには -pa/-wa の他にもう一つの名詞化接辞、-la(ŋ) がある（著者の第一インフォーマントはこれを常に -laŋ と発音するが、もう一人の第二インフォーマントはこれを常に -la と発音しており、バリエーションが見られる）。この -la(ŋ) は以下の例 (28), (29) のように、属格標識が付いた人称代名詞や疑問代名詞 ‘who’ の後に付き「私のもの」、「誰のもの」といった意味を表すのに使用される。

(28) <sup>H</sup>su-i-laŋ            <sup>L</sup>hin-pa  
 who-GEN-NMLZ    be-NMLZ  
 ‘Whose is this?’

(29) <sup>H</sup>ŋa-i-laŋ            <sup>L</sup>hin  
 1sg-GEN-NMLZ    be  
 ‘(It) is mine.’

-la(ŋ) はまた、人称代名詞や疑問代名詞などの名詞だけでなく、属格標識が付いた動詞語幹にも使用されることがある。

(30) <sup>H</sup>cu    <sup>H</sup>ca-i-laŋ-ca    <sup>H</sup>ucyu    <sup>L</sup>pisi-ca-ra    <sup>H</sup>pin-o  
 this    eat-GEN-NML-ART    that    baby-ART-DAT    give-IMP  
 ‘This one to eat, give (it) to that baby.’

動詞語幹に使用される例としては他にも、例 (18) ですで見たとおり、-te(n) を伴って副詞節 ‘when ...’ を形成するケースがある (<sup>H</sup>cyā-laŋ-ten ‘when (he) looked’) が、このケースでは属格標識は使用されず、-laŋ は動詞語幹に直接付く。

<sup>10</sup> Glover & Landon (1980: 48) によれば、グルン語には少なくとも大きく分けて3つの方言・ヴァリエーション、East, Central, West があり、Warren Glover 他が Glover (1974) 他で記述している Ghachok 方言はそのうち West に属する。グルン語の他の方言については未だ未調査・未記述のままであり、これらの方言では事情が異なる（つまり、属格標識が使われていない）可能性もある。

- (31) <sup>H</sup>ŋa <sup>H</sup>ken <sup>H</sup>ca-se <sup>1</sup>mu-laŋ-te(n) <sup>2</sup>the <sup>H</sup>kha-ci  
 1sg meal eat-SEQ be-NMLZ-when 3sg come-PAST  
 ‘When I was eating a meal, s/he came.’

この -laŋ-te(n) の -laŋ は、先に述べた別の名詞化接辞 -pa/-wa に置き換え可能であり、この点で、この構文において -laŋ は -pa/-wa と同じ機能を果たしていると言える。

- (32) “<sup>H</sup>he: <sup>H</sup>ŋa-i-laŋ <sup>H</sup>no <sup>H</sup>ā <sup>H</sup>kha-cin <sup>L</sup>pi-se <sup>H</sup>nari <sup>H</sup>nari <sup>H</sup>ra  
 IJ 1sg-GEN-NMLZ TOP NEG come-RES say-SEQ before before goat  
<sup>L</sup>taŋ-ce <sup>1</sup>ne-wa-ten <sup>H</sup>nana-se <sup>H</sup>nya-cyu-wa  
 drive-SEQ go-NMLZ-when eZ-ERG call-PAST-NMLZ  
 ‘(He) said, “Oh, mine (i.e., my lover) has not come”, and when, a long time ago, (he) drove goat(s) (and) went (i.e., left there), (the) elder sister(s) called out (to him).’

実は、タンベの -la(ŋ) と同源と思われる形態素はタマン諸語に広く分布しているのであるが、それぞれの言語・方言の記述が十分でなかったこともあり、これまであまり注目されて来なかった。他のタマン諸語・方言について詳細に記述することは本論の目的の範囲を超えているので、それは別の機会に譲ることとするが、以下、主なポイントについてのみ概説する。

まず指摘しておかなければならないのは、タマン語群において属格標識は、タンベの -i と同源の形式と、3.2.2. でも触れたマナン語の -la と同源の形式の二系統があり、タンベの名詞化接辞 -la(ŋ) はこの後者の系統と同源であると考えられる、という点である。前者の系統である属格標識は、東タマン語 (Risianku 方言など)、タマン語 Dhankute 方言、マナン語以外の、現在までに報告されているすべてのタマン諸語・方言に、また後者の系統である属格標識は、東タマン語、西タマン語、タマン語 Dhankute 方言、グルン語 Ghachok 方言とマナン語に存在している。前者の系統は Benedict (1972: 89, note 260; 96) が “a genitival (subordinating) suffix” として再構築している PTB \*-ki に繋がるものであるが、Noonan (2011) はタマン祖語のレベルで属格標識 \*-kyi を再構築し、この系統の属格標識が後者の系統の属格標識より古いものであると述べている。

タマン語群の言語の内、最も東に位置する東タマン語とタマン語 Dhankute 方言では、後者の系統の形態素は純然たる属格標識として機能しており (Risianku 方言、Dhankute 方言では属格標識はいずれも -la; Mazaudon 2003; Poudel 2006)、Noonan の指摘が正しければ、古い系統の属格標識が新しい系統である後者の形式に完全に置き換えられている。これに対し、タマン語群言語域の西側に位置するセケ語タンベ方言、タカリ語 Syang 方言、タカリ語 Tukche 方言では、後者の

系統の形式は存在するが属格標識としては使用されておらず、タンベの **-la(ŋ)** のようにいずれも「誰々の(もの)」という意味を表すなどの機能で使用されている<sup>11</sup>。以下にタカリ語 Syang 方言における **-laŋ** の使用例を示す。タンベとは異なり、**-laŋ** の前に属格標識が使用されていないが、これはタカリ語 Tukche 方言でも同様である。

(33) Yhulkasom Thakali (Syang)

- a. <sup>1</sup>cu    <sup>2</sup>su-laŋ    <sup>1</sup>hi-me  
 this    who-NMLZ    be-MIR.Q  
 ‘Whose is this?’
- b. <sup>1</sup>ŋa-laŋ    <sup>1</sup>hi-mo  
 1sg-NMLZ    be-MIR  
 ‘(This) is mine.’

この両者の間に挟まれた西タマン語、グルン語、マナン語では、タンベの **-la(ŋ)** などの名詞化接辞と、東タマン語などの属格標識 **-la** が歴史的に関係しており同源であることを示す興味深い言語現象が見られる。まず、セケ語、タカリ語と地理的に最も近いマナン語にはこの系統に繋がる形態素として、先に 3.2.2. で述べた属格標識 **-ʔa** (Hoshi 1986; Hildebrandt 2004 の記述では **-la**) と名詞化接辞 **-lə** の二つが併存している (Hildebrandt 2004 ではこれについての記述、例文は無い)。以下は Hoshi (1986) があげている名詞化接辞 **-lə** を使った例文である。

(34) Manangba<sup>12</sup>

- a. <sup>2</sup>konpə    <sup>3</sup>ta:sə-ʔa    <sup>3</sup>kye:-ko    <sup>3</sup>ŋə-lə  
 monastery    far.there-GEN    field-DEF    1sg-NMLZ  
 ‘The farm beyond the temple is mine.’
- b. <sup>2</sup>sə-sho-ko    <sup>4</sup>su-lə  
 good-SP-DEF    who-NMLZ  
 ‘Whose is the best?’ (Hoshi 1986: 297)

グルン語については、Glover (1974: 70) が ‘genitive’ として **-e** と **-l(a)** (Glover et al. 1974 では **-la** ~ **-la:**) の二つをあげているのであるが、Glover (1974) や

<sup>11</sup> タカリ語 Tukche 方言については、著者が知る限りこのような記述が明確にされている文献は存在しないが、Hari and Maibaum (1970) にこのように分析できる例文が散見される。

<sup>12</sup> ここでは Hoshi (1986) の原著のまま音調番号 1 ~ 4 を引用するが、Hoshi の音調番号 1 ~ 4 の使用、それらが示す音調は、Mazaudon (1973) や Hildebrandt (2004) のそれとは異なっていることを注記しておく。

Glover (1970), Glover et al. (1977) を詳細に吟味していくと、後者の方は属格標識としての機能もあるようだが、大多数の例（例えば例 (35)）では、上述のタンベ、タカリ語やマナン語の名詞化接辞と同じような機能を果たしていることがわかる（よって (35) では *-la:* を NMLZ と注解している）<sup>13</sup>。

(35) Gurung (Ghachok)

cu'      ŋa-la:'  
this      1sg-NMLZ  
'This is mine.'

(Glover et al. 1977: 57)

西タマン語 (Sahu 方言) については、Taylor (1973) が属格標識として *-i*, *-ki* と *-la* の三つの形を載せているのであるが、音韻的に条件づけられた異形態ではないようであり、それぞれの機能や使用法についての記述が全く無い為、甚だ読者を混乱させるものになっている。しかし、グルン語と同様、Taylor (1970) や Taylor (1973) の例文を良く精査していくと、*-la* は、その後に *head noun* が無く、*-la* が付いた名詞自身が *head noun* として機能している例がかなり多いことがわかる。また、*-ki* と *-la* が併用されている形 (*-ki-la*) もあり、その後に *head noun* がある例（つまり純然たる属格標識）と無い例（つまり名詞化接辞）のどちらのケースにも使われている。

これに対して、近年発表された Owen-Smith (2013) によると、同じ西タマン語の Indrawati Khola 方言 (Sindhupalchok District) では、*-la* は属格標識としては使用されておらず、この方言での唯一の属格標識である *-ki* の後か ((36a-b) 参照)、あるいは *-la* 単独で現れ (例 (36c))、名詞化接辞として機能している。

(36) Indrawati Khola (Western Tamang)

a. **ram-ki-la**

Ram-GEN-NMLZ  
'Ram's [one]'

b. <sup>2</sup>a-ki-la      <sup>2</sup>cyun      <sup>1</sup>mu-la

2sg-GEN-NOM      little.brother      COPA-FUT

'Do you have (any) younger brothers or sisters?'  
[More literally: are there any younger brothers/sisters of yours?]

<sup>13</sup> Glover (1974: 89, note 26) は 'In predicate position the possessive is *-l(a)*.' と述べ、この形態素がこうした機能を持っていることを、非常に分かり難い表現ではあるが、記述している。

- c. <sup>2</sup>ocu <sup>1</sup>ŋi-la <sup>3</sup>hin-la  
 DEM 1sg.GEN-NOM COPE-FUT  
 ‘That’s mine.’

Owen-Smith (2013) は西タマン語の他の諸方言での -la の分布にも言及しており、そこから推測するに、西タマン語の諸方言においては、属格標識の機能が、元々の属格標識の \*-k(y)i の反映形 (reflex) から、元々名詞化接辞であった -la に移行している歴史的変化の過程上にあり、東タマン語やタマン語 Dhankute 方言ではこの置き換えが完了していると考えられる。

先にも述べたように、この名詞化接辞については、多くのタマン言語・方言において記述がまだ十分でなく、今後、それぞれの言語・方言におけるより詳細な調査、記述・報告が待たれるところである。

### 略号

文法用語		NEG	negative
1	1st person	NMLZ	nominalizer
2	2nd person	NPT	non-past
3	3rd person	O	‘O’ argument
ABL	ablative	OBL	oblique
ADVLZ	adverbializer	OPT	optative
ANT	anterior	PAST	past
ART	article	pl	plural (used for pronouns)
COND	conditional	PL	plural
CONF	confirmation	PTCL	particle
CONT	continuous	Q	interrogative/question
DAT	dative	RES	resultative
DEF	definite	S	‘S’ argument
DEM	demonstrative	SEQ	sequential
DIR	directional	sg	singular (used for pronouns)
ERG	ergative	SP	superlative
FUT	future	TOP	topic
GEN	genitive		
HBT	habitual	親族名称	
IMP	imperative	eZ	elder sister
incl	inclusive (used for pronouns)	GD	granddaughter
IJ	interjection	S	son
LOC	locative	SW	son’s wife
MIR	mirative		

## 参考文献

- Benedict, Paul K. 1972. *Sino-Tibetan: A Conspectus*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Beyer, Stephan V. 1992. *The Classical Tibetan Language*. Albany: SUNY Press.
- DeLancey, Scott. 1999. "Relativization in Tibetan". In: Yogendra Yadava and Warren Glover (eds.), *Studies in Nepalese Linguistics*, 231–249. Kathmandu: Royal Nepal Academy.
- . 2005. "Relativization and nominalization in Bodic". *BLS* 28S: 55–72.
- Genetti, Carol. 2011. "Nominalization in Tibeto-Burman languages of the Himalayan area: A typological perspective". In: Foong Ha Yap, Karen Grunow-Härsta, and Janick Wrona (eds.), *Nominalization in Asian Languages: Diachronic and Typological Perspective*, 163–193. Amsterdam: John Benjamins.
- Genetti, Carol, A.R. Coupe, Ellen Bartee, Kristine Hildebrandt, and You-Jing Lin. 2008. "Syntactic aspects of nominalization in five Tibeto-Burman languages of the Himalayan area". *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 31.2: 97–144.
- Georg, Stefan. 1996. *Marphatan Thakali*. München/Newcastle: Lincom Europa.
- Glover, Warren W. 1970. "Gurung Texts". In: F.K. Lehman (ed.), *Tone Systems of Tibeto-Burman Languages of Nepal, Part III: Texts I (Occasional Papers of the Wolfenden Society on Tibeto-Burman Linguistics, Volume III)*, 1–131. Urbana: Department of Linguistics, The University of Illinois.
- Glover, Warren W. 1974. *Sememic and Grammatical Structures in Gurung (Nepal)*. Norman, Oklahoma: Summer Institute of Linguistics.
- Glover, Warren W., J.R. Glover, and Deu Bahadur Gurung. 1977. *Gurung-Nepali-English Dictionary with English-Gurung and Nepali-Gurung Indexes* (Pacific Linguistics C-51). Canberra: The Australian National University.
- Glover, Warren W., and John K. Landon. 1980. "Gurung dialects". In: Ronald L. Trail et al. (eds.), *Papers in South-East Asian Linguistics No.7 (Pacific Linguistics Series A-53)*, 29–77. Canberra: Australian National University.
- Hari Annemarie, and Anita Maibaum. 1970. "Takhali Texts". In: F.K. Lehman (ed.), *Tone Systems of Tibeto-Burman Languages of Nepal, Part III: Texts I (Occasional Papers of the Wolfenden Society on Tibeto-Burman Linguistics, Volume III)*, 165–306. Urbana: Department of Linguistics, The University of Illinois.
- Hildebrandt, Kristine A. 2004. "A grammar and glossary of the Manange language". In: Carol Genetti (ed.), *Tibeto-Burman Languages of Nepal: Manange and Sherpa (Pacific Linguistics 557)*, 1–189. Canberra: The Australian National University.
- Honda, Isao. 2002. "Seke phonology: A comparative study of three Seke dialects". *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 25.1: 191–210.
- . 2003. "A sketch of Tangbe". In: Tej Ratna Kansakar and Mark Turin (eds.), *Themes in Himalayan Languages and Linguistics*, 49–64. Kirtipur, Nepal: Tribhuvan University and South Asia Institute at Heidelberg, Germany.
- . 2007. "A comparative and historical study of demonstratives and plural markers in Tamangic languages". In: Roland Bielmeier and Felix Haller (eds.), *Linguistics of the Himalayas and Beyond*, 97–118. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 本田伊早夫. 2010. 「セケ語の格標識について」. In: 澤田英夫 (編), 『チベット=ビルマ系言語の文法現象1：格とその周辺』, 109–125. 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Hoshi, Michiyo. 1986. "An outline of the Prakaa grammar—a dialect of the Manang language". *Monumenta Serindica* 15: 187–317. Tokyo: Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.
- Mazaudon, Martine. 1973. *Phonologie Tamang*. Paris: Société d'Études Linguistiques et Anthropologiques de France.
- . 1988. "The influence of tone and affrication on manner: Some irregular manner correspondences in the Tamang group". Paper presented at the 21st International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics held in Lund.
- . 2003. "Tamang". In: Graham Thurgood and Randy LaPolla (eds.), *The Sino-Tibetan languages*, 291–314. London/New York: Routledge.
- Noonan, Michael. 1997. "Versatile nominalizations". In: Joan Bybee, John Haiman, and Sandra Thompson

- (eds.), *Essays on Language Function and Language Type, in Honor of T. Givon*, 373–394. Amsterdam: John Benjamins.
- . 2003. “Nar-Phu”. In: Graham Thurgood and Randy LaPolla (eds.), *The Sino-Tibetan Languages*, 336–352. London/New York: Routledge.
- . 2007. “Nominalizers in Tamangic languages”. invited paper presented at *the International Workshop on Nominalizers and Copulas in East Asian and Neighboring Languages*, January 9, 2007.
- . 2008. “Nominalization in Bodic languages”. In: María José López-Couso and Elena Seoane (eds.), *Rethinking Grammaticalization: New Perspectives for the Twenty-first Century*, 219–238. Amsterdam: John Benjamins.
- . 2011. “Aspects of the historical development of nominalizers in the Tamangic languages”. In: Foong Ha Yap, Karen Grunow-Härsta, and Janick Wrona (eds.), *Nominalization in Asian Languages: Diachronic and Typological Perspective*, 195–214. Amsterdam: John Benjamins.
- Owen-Smith, Thomas. 2013. “Genitive and aspect in a northern dialect of Tamang”. Paper presented at the 45th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics held in Singapore.
- Poudel, Kedar Prasad. 2006. *Dhankute Tamang Grammar*. München/Newcastle: Lincom Europa.
- Taylor, Doreen. 1970. “Tamang Texts”. In: F.K. Lehman (ed.), *Tone Systems of Tibeto-Burman Languages of Nepal, Part III: Texts I (Occasional Papers of the Wolfenden Society on Tibeto-Burman Linguistics, Volume III)*, 132–164. Urbana: Department of Linguistics, The University of Illinois.
- . 1973. “Clause patterns in Tamang”. In: Austin Hale, and David Watters (eds.), *Clause, Sentence, and Discourse Patterns in Selected Languages of Nepal, Part II: Clause*, 81–174. Norman, Oklahoma: Summer Institute of Linguistics.
- Varenkamp, Bryan. 2003. “A Look at *-ba* in Central Eastern Tamang”. In: Tej Ratna Kansakar and Mark Turin (eds.), *Themes in Himalayan Languages and Linguistics*, 219–232. Kirtipur, Nepal: Tribhuvan University and South Asia Institute at Heidelberg, Germany.
- Vinding, Michael. 1998. *The Thakali: A Himalayan Ethnography*. London: Serindia.
- Watters, David E. 2008. “Nominalization in the Kiranti and Central Himalayish languages of Nepal”. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 31.2: 1–43.